ニ多ク栽ユ、葉ニ鋸齒ナクシテ漆葉ヨリ長シ、是モ亦漆ノ一種ナリ、黄櫨ハ救荒本草ニ圖アリ、葉圓木黄、枝莖色紫赤、葉似杏葉而圓、大木可染黄ト云時ハ、ハゼノ類ニ非ズ、

增、實ヨリ蠟ヲ取ル、ハゼニ品類多シ、實ニ大小アリ、實大ナル者ハ蠟ヲ得ルコト多ク、小ナル者ハ少シ、筑前松山ニ多ク作ル、松山種ト云、上品ナリ、

本邦ニテ櫨ヲハゼト呼ブ、琉球國志略ニ、櫨一名油樹子可搾油ト云ハ、卽ハゼノコトナリ、琉球ニハ和語ヲ通用スル故ナリ、

〔廣益國產考八〕松山を急に仕立る心得○中略

九州或國諸侯の藩中に山奉行を勤る正田何某といへる人あり、○中略櫨木の有りけるに、登らざる木ありければ、筑後國は、みな接木にして植ぬれば、登らざる木なしといへる事を聞及び、態と筑後の國へ人を遣し、接人を兩人雇ひ、是を有來れる櫨の登らざるをみな接木し、尙接方を習はせ仕立ける儘、其所に用る蠟は、他國より買入ざるやうになりて、國益となりたり、

〔農家益後篇乾〕總論

櫨生蠟は何程一時に大坂へ入津ゑたりとも、價の高下は大ちがひなきものにして、捌口の早きものなれば、當時此櫨にまさるものあらじ、浪花にては蠟問屋仲間三十軒あり、各壹軒にて年中に金何万兩の商ひする事とぞ、さも有べき事か、日本のうち、凡七八歩通は櫨を作らざる國なれば、其所へは皆大坂より積送る事也、其外晒蠟屋五十軒、櫨を潰して生蠟に絞る、絞り屋五拾軒、中買百軒荷著問屋と唱る仲間三十軒、廻著問屋と號る仲間三十軒有りて、唐物に續いて大いなる商ひ高のものにして、廣大の事也、斯廣きものを辨へず、己が鬢にぬり燭に燈し、常に其香にむせびながら、櫨は毒木抔と誤るは何事ぞや、茲に郡村の益となりし事を一二擧べし、豐後の國日田郡に川内村といえる小村あり、其村の庄官半藏といへる人、凡五十年以前櫨は一村を助るの益